公益社団法人国際演劇協会（ITI/ユネスコ）日本センターは、ユネスコ傘下の国際組織である国際演劇協会ITI（International Theatre Institute）加盟の公認団体です。ITIは世界平和と相互理解の促進を希求するユネスコ憲章の精神に基き、演劇による国際交流の増進を目的として1948年創設され、現在約85の国と地域が加盟しています。

公益社団法人 国際演劇協会（ITI/ ユネスコ）日本センター
Japanese Centre of International Theatre Institute / UNESCO

I.T.I.

I.T.I.NEWS 2017.1.31. No.127

国際理解と平和にドラマの力を

年頭に当たって

2017年、新しい年を迎えました。

ITI日本センターの活動は国際演劇年鑑の編集を進めながら、年末の「紛争地域で生まれた演劇」では予想を超えて多くのお客様を迎え活況を呈しました。12月17日（土）の『ジハード』公演後のトークでは作者のイスマエル・サイディ氏がインターネット電話「スカイプ」でベルギーから生出演してくださり、国境を越えての交流に双方から拍手がおくられたのも印象的でした。また、協会の中に新しく英連邦部会が生まれ、会員自身が翻訳したものをリーディングによって共有するなど、新しい活動の場が広がってきたのも特筆すべきことでした。

この世界には未だ、戦乱の収まらない地域にさまざまな民族が苦しみを抱えて暮らしています。たまさかの海外の旅などでは理解しえない事象がドラマによって掘り起こされ、少しだけ、異なる民族の内面に近づくことが出来る。私はドラマほど、国際理解を得るよい手だてはないと思っています。

協会は相変わらずの財政難の中ではありますが、企画に、交渉に、また、事務局は助成金を獲得するための書類作成に汗をかいています。ホームページもリニューアルにより充実してきました。ぜひ、さまざまな情報にアクセスしていただき、多くの会員の皆様に事業に参加していただき、そして、私たちの活動がユネスコの理念・国際理解と平和の構築につながるよう、今年も、努力してまいりたいと思っております。

『ジハード』トーク　中央がスカイプ参加のイスマエル・サイディ氏。手前左から瀬戸山美咲氏＝『ジハード』演出、角田美知代氏＝通訳、デボラ・ドゥ・リエム・アビスロー氏＝『ジハード』プロデューサー／ツアーマネージャー、新野守広氏＝司会

公益社団法人 国際演劇協会日本センター会長　永井　多恵子

ITI日本センター平成28年度定時社員総会報告

ITI日本センターは、平成28年度の定時社員総会において、平成27年度の計算書類・事業報告の承認を行うと共に、高萩宏理事の辞任を承認し、後任理事に糟谷治男氏を選任しました。

日時　平成28年6月19日（日）10時02分～10時54分

場所　松竹株式会社大会議室（東劇ビル10階）

会員現在数　225名（平成28年5月22日理事会開催時）

出席者　140名（委任状107名）

出席会員　33名＝青柳敦子、安宅りさ子、安孫子 正、伊藤 洋、内田洋一、大笹吉雄、小田切洋子、オンパロスダンスプロジェクト（居上紗笈）、糟谷治男、加納豊美、河内美穂(miho)、後藤絢子、後藤祥子、小林弘文、斎明寺（関根）以玖子、真藤美一、高萩 宏、永井多惠子、永江 巌、中村（壱岐）照美、中山夏織、新見真琴、蓮池奈緒子、林 英樹、菱沼彬晁、舟本（伊藤）巴子、堀川登志子、前田真里衣、松下芳江、松田和彦、三輪えり花、吉岩正晴、和崎信哉

社員総会に出席した理事及び監事　安宅りさ子、安孫子 正、伊藤 洋、大笹吉雄、小田切洋子、加納豊美、小林弘文、斎明寺（関根）以玖子、真藤美一、永井多惠子、永江 巌、中山夏織、林 英樹、菱沼彬晁、舟本（伊藤）巴子、松田和彦、三輪えり花、吉岩正晴、和崎信哉

配布資料　平成28年度定時総会議案書（p1～15、平成28年度事業計画書）

補足資料（平成28年度正味財産増減予算書、各事業関連資料）

開会　10時02分に開会。会長永井多惠子の挨拶の後、議長に副会長（代表理事）の安孫子 正を選び、直ちに議事に入りました。

定足数の確認　この総会には、正会員33名が出席し、委任状提出者107名を加えて140名の出席があった。本定時総会は、会員現在数225名の過半数にあたる113名の出席が必要であるが、出席者数がこれに達したため、総会は有効に成立しました。

決議事項

［第一号議案］　第三期（平成27年4月1日～平成28年3月31日）計算書類・平成27年度事業報告の承認

［第二号議案］　理事の補充について

辞任：高萩　宏（平成28年2月5日付）

理事候補者：糟谷治男（公益財団法人都民劇場・理事長）

報告事項　平成28年度事業計画について

第一号議案の審議に先立ち、議案書の「平成27年度事業報告書」に基づき、報告を行いました。（当該事業報告は、平成28年5月22日開催の平成28年度第1回理事会で承認済です）

続いて、第一号議案の審議に移り、定款第12条に定める社員総会の決議事項に関わる貸借対照表、正味財産増減計算書について、さらに、財産目録及び監事による監査報告書の内容について討議した結果、全員一致で承認されました。

次いで、第二号議案である理事の補充に関する審議を行い、全員一致で承認されました。被選任者は即時その就任を承諾しました。

第一号議案ならびに第二号議案に関連して、「紛争地域から生まれた演劇」に関して、上演劇場の変更はないか、もう少しキャパシティの大きなところで実施する予定はないか、入場料収入は見込めないか、等の質問が出ました。

これに対しては、担当理事より「東京芸術劇場の変更は難しい。予算内で収めるためには、劇場費、スタッフ費を抑えるしか

ないが、東京芸術劇場の場合は共催ということで経費を下げていただいている。入場料収入については、なじみのない国に加えて、作品自体、日本で初めて紹介するものであり、観客動員が果たしてできるかどうかの問題もある。そのあたりは課題として残っている」といった指摘がなされました。

以上により、総会はすべての議案の議決を終了し、10時54分に散会しました。

議案案、議事録をご要望の方は、事務局までお問い合わせください（電話03・3478・2189／mail@iti-j.org）

（報告　副会長・事務局長代行・吉岩正晴）

ITI日本センター監事・伊藤巴子さんご逝去

ITI国際演劇協会日本センター監事、日中演劇交流話劇人社理事長、俳優の伊藤巴子（本名・舟本巴子）さんは2016年12月17日未明、東京杉並区宮前の自宅で亡くなりました。85歳でした。

1954年、俳優座養成所を卒業（第3期生）、劇団仲間の創設に参加し後にフリーに。1957年、ミハルコフ作『乞食と王子』に主演、通算1580公演を記録。1958年、マルシャーク作『森は生きている』に主演、通算2000公演を記録。1965年、第2次日本新劇合同訪中公演団に参加、『かぐや姫』に主演、北京、上海、南京を巡演。新劇の舞台は『華岡青洲の妻』『婉という女』『人形の家』『風浪』『十二月』などに出演。

ITIの事業として2010年、浙江大学と上海戯劇学院の共催の「演劇と環境シンポジウム」参加、井上ひさし作『水の手紙』を群読、過士行作『魚人』を日本語上演しました。

1984年、『乞食と王子』『森は生きている』の演技により、第19回紀伊國屋演劇賞・特別賞、1994年、木下順二、尾崎宏次両氏選考の山本安英賞、2015年、日中演劇交流への貢献により文化長官賞などを受賞しています。近年は全国各地の児童青少年演劇の制作現場を支援し、長年の経験を生かした演技指導や企画・制作の助言を行うなど、草の根の演劇活動に根を下ろしていました。

世界のＩＴＩセンター イベントカレンダー

ITI本部Webサイトより（2017年1月～7月）

■ Theatre and the capacity of independent department（セミナー）
3月5～7日
開催地：テヘラン（イラン）
http://www.iti-worldwide.org/pdfs/International_private_theater_seminar.pdf

■ The 12th edition of the Croatian Theatre and Dance Showcase（ショウケース）
4月20～25日
開催地：ザグレブ、リエカ（クロアチア）
※以前のレポートは下記サイトより読むことができます。
http://www.hciti.hr/web/wp-content/uploads/Kretanja-25-web.pdf

■ DaNang International Fireworks Festival（フェスティバル）
4月29日～6月30日
開催地：ダナン（ベトナム）
問い合わせ：Ngocle@lequyduong.com

■ Theater der Welt（フェスティバル）
5月25日～6月11日
開催地：ハンブルク（ドイツ）
http://www.theaterderwelt.de/

■ Festival Theaterformen 2017 （フェスティバル）
6月8～18日
開催地：ハノーファー（ドイツ）
https://www.theaterformen.de/de/aktuell

■ The International Sea Festival 2017（フェスティバル）
6月10～13日
開催地：ニャチャン（ベトナム）

■ 2017 International Festival of Ancient Greek Drama（フェスティバル）
7月
開催地：キプロス（ギリシア）
https://www.greekdramafest.com/

※ITI本部のホームページがリニューアルされました。各国センターリストからさまざまなプロジェクトの紹介、上記イベントカレンダーなど読みやすくなっています。いずれはフランス語・スペイン語・中国語表記も行う予定とのこと。ぜひご覧下さい。http://www.iti-worldwide.org/index.html

朗読劇『この子たちの夏 1945・ヒロシマ ナガサキ』

戦後70年を過ぎて 戦争の伝承と国際交流

1985 年以来、のべ 400 市町村で 802 回公演を達成した『この子たちの夏』　写真撮影・谷古宇正彦

１９４５年８月のヒロシマとナガサキを生きた母と子の声を通して、戦争の姿を伝える朗読劇『この子たちの夏　１９４５・ヒロシマ　ナガサキ』は、１９８５年から上演を重ね、２０１１年からはＩＴＩ日本センターが主体となって東京公演を行っています。今年度は、８月13日、14日と世田谷パブリックシアターで公演を行いました。これで本作はのべ４００市町村で８０２回上演されたことになります。

女子高生が朗読に参加して

日本センターでは「若い世代に観てほしい。2世代、3世代で観てほしい」という願いから、広報などに毎年工夫を重ねています。リピーターのお客様も多く、アンケートには毎年、「今度は子どもと観たい」「親と観たい」「子どもの成長に合わせて何度も観に来ている」などの言葉が多く寄せられます。また、本作には女子中高生が朗読をする箇所があります。参加者や参加者のご家族、学校の先生からも「参加者は朗読に参加してから戦争のことを考えるようになった」「朗読をきっかけに観にきている」などのメッセージが届いています。

英語イヤホンガイドを無料貸出し

また、東京公演では、作品を通じた国際間の対話を促進するため、英語のイヤホンガイドを無料で貸出しています。今年は９つの大使館（アイルランド、カメルーン、ジンバブエ、スーダン、タンザニア、ベネズエラ、南アフリカ、ラオス、ロシア）や日本在住の留学生にご来場いただきました。言葉の壁を越え、本作を多くの人に届ける取組みはこれからも続きます。

命のリアリティを伝える座談会

８月13日の公演終了後、音楽評論家の湯川れい子さんと医師の堂園凉子さん、永井多恵子会長による座談会を行いました。敗戦から70年が過ぎ、戦争体験者が日に日に少なくなる今、若い世代に戦争をどう伝えるか。命のリアリティを届ける大切さと難しさについて、トークが繰り広げられました。日本センターのホームページに、座談会の内容を掲載しております。http://iti-japan.or.jp/summer_talk2016/

当公演は、公益財団法人ＪＫＡによる競輪の補助事業（Ring Ring プロジェクト）「親と子のふれあい交流活動補助事業」により実現しました。２０１７年度は本作の公演をお休みします。再来年度以降の再演に、どうぞご期待ください。

（報告　事務局・後藤絢子）

第3回高校生劇評グランプリ・高校生劇評応援プロジェクト

最優秀賞に清林館高校・久留原有希さん「フレンチミュージカルの可能性」

第3回「高校生劇評グランプリ」最優秀賞は10月22日（土）の最終選考会において愛知県清林館高校3年生の久留原有希さんによる『1789―バスティーユの恋人たち―』（主催・東宝）の劇評「フレンチミュージカルの可能性」、優秀賞に10の作品が決定し、公式ウェブサイトで選考委員講評と合わせて発表しました。団体賞は2年連続で積極的に取り組んだ「大阪市立咲くやこの花高等学校」が選ばれました。今回初の試みとして第1回、第2回の優秀賞受賞者有志12名が一次選考に参加し、同世代の視点も反映した選考結果となりました。

劇評グランプリ第一次選考会の会場風景

これまで冬季だった募集時期を夏季（9月）に変更した影響もあったのか、応募総数は36編と少なくなってしまいましたが、演劇（22作品）を中心に、ミュージカル、歌舞伎、能、文楽と幅広いジャンルを対象とした劇評が寄せられ、応募者の所属高校所在地も、東京（15名）、大阪（14名）に加え、愛知、鹿児島、群馬、奈良と全国に広がりました。

高校生劇評応援プロジェクト実施

劇評グランプリの関連事業としてアーツカウンシル東京の助成を受け「高校生応援チケット」、「観劇カフェ」からなる「高校生劇評応援プロジェクト」を実施しました。

「高校生応援チケット」では、高校生劇評グランプリ実行委員会メンバーでもある日本劇団協議会からの各劇団への積極的な働きかけもあり、6月～8月に上演された18公演に1000円以下の高校生割引チケットを提供いただき、同伴者割引チケット、クレジットカード決済も設定し、計107名が応援チケットを利用しました。

また、作品の理解を深めるとともに観劇仲間との交流の場を提供することを目的に、7月のミュージカル「マイ・フェア・レディ」（ゲスト・山内佳寿子氏＝ミュージカル誌副編集長）、8月の「頭痛肩こり樋口一葉」（ゲスト・井上麻矢氏＝劇団「こまつ座」代表）終演後に、ゲストを囲んで「観劇カフェ」を開催しました。

ネスタ Next generation STAGE Alliance 始動

第1回、第2回高校生劇評グランプリで優秀賞を受賞した高校生・大学生有志が観劇仲間のグループ"NeSTA"を結成しました。4月に開設した観劇情報発信サイト(https://www.nesta5.jp/)は、若い世代の観劇ファンの視点がわかり興味深いと、幅広い世代から注目されています。また、メンバーは「観劇カフェ」にスタッフとして参加し、観劇を通した高校生との交流にも積極的にかかわっています。

今後の発展に向けて

2013年12月に第1回を開催した高校生劇評グランプリが、回を重ね、若い世代の観客育成プロジェクトへと発展してきたのも、協賛各社、劇場・劇団など主催者・関係団体の皆様、丁寧に劇評作品を読み込んでくださった選考委員の先生方のご支援・ご協力のおかげにほかなりません。今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

（報告　事務局・千徳美穂）

シリーズ8

紛争地域から生まれた演劇

リーディングと「シアタートーク」

初訳・初演２作品

日本で知られていない海外戯曲を日本語に翻訳して、リーディング上演とトークで紹介する「紛争地域から生まれた演劇」シリーズ。７回目となる今回はイランとベルギーの戯曲を紹介しました。12月13日(火)の東京新聞夕刊にはベルギーの戯曲『ジハード』の記事が、16日（金）の公明新聞には「紛争地域から生まれた演劇８」の公演案内が掲載されました。

台本は当日渡しのぶっつけ本番

イラン『白いウサギ、赤いウサギ』

イランのナシーム・スレイマンプール（１９８１～）さんの戯曲『白いウサギ、赤いウサギ』は、兵役拒否により国外に出られなかった作家が、どうしたら国境を越えられるか考えた挙句、英語で書いた作品です。上演を観たり戯曲を読んだりして内容を知ってしまった人は演じることができず、出演者は、当日、舞台の上で台本を受け取るというユニークな手法で書かれています。出演者の四者四様のスリリングなパフォーマンスで、会場は日々、沸きました。

17日（土）には、トークイベントを行いました。本作の翻訳者である關智子さんと、イランに駐在経験のある河野孝さん（文化ジャーナリスト・演劇評論家）をゲストに迎え、ウサギに込められた寓意から、イランのこと、作品や台本、これまでの上演のことなど、作品に潜む秘密を共有し、話し合う良い機会となりました。「国際演劇年鑑２０１７」には、河野さんによるレビューと、ナシームさんにご紹介いただいたマルジャーン・ムーサヴィー氏によるイラン演劇レポートを掲載いたします。

シリアに渡る移民２世の若者

ベルギー『ジハード』

ベルギーからはモロッコ系移民２世というバックグラウンドを持つベルギー出身の作家イスマエル・サイディさん（１９７６～）の『ジハード』をご紹介しました。「ジハード（聖戦）」のため、内戦の続くシリアへ渡るブリュッセルの移民２世の若者３人を、ユーモアを織り交ぜながら率直に描いた作品で、２０１４年にベルギーで初演され、２０１５年のパリ同時多発テロ事件、翌年のブリュッセル連続テロ事件を経て、これまで７万人以上が鑑賞しています。

17日と18日の公演後に行ったトークには、ゲストとして作品専属のプロデューサー／ツアーマネージャーであるデボラ・ドゥ・リエム・アビスローさん

演劇と世界――日本と世界の出会いをめぐって

『ジハード』の舞台　左から本折最強さとし、盛隆二　日下部そう　（撮影・石澤知絵子）

（両日）と演出の瀬戸山美咲さん（両日）、藤井慎太郎さん（18日）、司会には新野守広さん（17日）と七字英輔さん（18日）をお迎えしました。当初来日を予定していた作家のイスマエルさんは体調不良により渡航がかなわず、17日のみ、スカイプを通してのトーク参加となりました。教育の大切さ、作品を観て笑ったり泣いたりしながら考えることの大切さ、作品が社会現象になるまでの経緯、本作の上演をめぐるフランスとベルギーでの行政の対応の違い、アイデンティティ喪失と過激化の関係など、興味深い話を聞くことができました。

本作については、作品の紹介が決まった折、イスマエルさんとデボラさんより「作品の意図を共有するために、演出家かプロデューサーと事前に会いたい」という要望がありました。これを受けて、瀬戸山さんにベルギーへ渡っていただきました。トークでは、瀬戸山さんが見聞きしたことについても伺うことができました。ＩＴＩ発行「国際演劇年鑑２０１７」に瀬戸山さんのベルギーレポートを掲載します。ご期待ください。

（報告　事務局・後藤絢子）

紛争地域から生まれた演劇８（２０１６年）
スタッフ・キャスト
12月14日（水）～18日（日）
東京芸術劇場アトリエウエスト（地下１階）

『赤いウサギ、赤いウサギ』
White Rabbit, Red Rabbit

作　ナシーム・スレイマンプール　Nassim Soleimanpour
訳　關　智子
出演　12月14日（水）19時半　堀源起（さいたまネクスト・シアター）
15日（木）19時半　占部房子
16日（金）19時半　髙田恵篤（演劇実験室◉万有引力）
17日（土）14時　美加理
共同製作　Aurora Nova
初演時製作　Volcano Theatre、ネセサリー・エンジェル、ヴォルフガング・ホフマン
ドラマトゥルク　ダニエル・ブルックス、ロス・マンソン

『ジハード』Djihad

12月17日（土）19時
18日（日）14時
作　イスマエル・サイディ　Ismaël Saidi
訳　田ノ口誠悟
演出　瀬戸山美咲（ミナモザ）
演出助手　庭山由佳
出演　日下部そう、盛隆二、本折最強さとし、中田顕史郎

【トークイベント】

▽『白いウサギ、赤いウサギ』をめぐって
12月17日（土）16時～17時
ゲスト
河野孝氏（文化ジャーナリスト・演劇評論家）
關智子氏（『白いウサギ、赤いウサギ』翻訳者）

▽『ジハード』をめぐって①
12月17日（土）『ジハード』上演後
ゲスト
イスマエル・サイディ（『ジハード』作家）
※スカイプ参加
デボラ・ドゥ・リエム・アビスロー（『ジハード』プロデューサー／ツアーマネージャー）
瀬戸山美咲（『ジハード』演出）
司会　新野守広（国際演劇評論家協会（AICT）日本センター会長、立教大学教授）

▽『ジハード』をめぐって②
ゲスト
デボラ・ドゥ・リエム・アビスロー（『ジハード』プロデューサー／ツアーマネージャー）
瀬戸山美咲（『ジハード』演出）
藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）
司会　七字英輔（演劇評論家）

◇　◇

文化庁委託事業　平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業
国際演劇年鑑２０１７特集企画
主催　文化庁　公益社団法人　国際演劇協会日本センター
共催　東京芸術劇場（公益財団法人　東京都歴史文化財団）
企画制作　公益社団法人　国際演劇協会日本センター

ＩＴＩ・東京芸術劇場共催「海外で活躍する

プロフェッショナル」シリーズ⑥

ハンブルク・ドイツ劇場専属俳優

原サチコさん

6回目を迎えた「海外で活躍するプロフェッショナル」シリーズ。今回は「原サチコのぶっちゃけドイツ演劇話4～ハンブルク・ドイツ劇場の今シーズン・難民との取り組みを中心に」と題してドイツの劇場と難民の関わり方についてお話を伺いました（7月26日、於：東京芸術劇場　シンフォニースペース）。

海外の舞台芸術の世界で活躍するプロフェッショナルは今、何を考え、どのように過ごしているのか。海外の劇場やカンパニーはどのように運営されているのか――このシリーズでは、日本に帰国中のプロフェッショナルの方たちを迎えてお話を伺っており、これまで、笈田ヨシさん（俳優／仏）、堀内元さん（舞踊家／米）、そして原さんにご登壇いただいています（共催＝東京芸術劇場［公益財団法人 東京都歴史文化財団］）。

原さんには初年度から継続的にお話いただいており、回を重ねるごとに内容は深化、来場される方の層も広がりをみせています。今回は、前回触れられた難民との関わりについて重点を置き、欧州への難民の大量移動に伴い揺れるドイツで今、演劇作品の中に難民問題がどのように反映されているのか、劇場は難民に対してどのような取り組みをしているのか、実際の現場で様々な体験をなさった原さんご自身に語っていただきたいと進めた企画です。

当日は劇場のインテンダント（芸術総監督）が自分の首をかけてまで挑んだ難民ケアの話、劇場スタッフや俳優による炊き出し、劇場ロビーに宿泊所を設置した話などを伺いました。後半では東京芸術劇場副館長の高萩宏さんにもトークに加わっていただき、難民の話から公共劇場の現状まで、本音のトークが繰り広げられました。「ドイツは日々刻々、政策も街の様子も変わっている。当日はこれをしっかり『ぶっちゃけ』たい」――企画を詰めていたある日、原さんから届いたメッセージの通り、むきだしのドイツと難民たちにアクセスすることができた2時間半となりました。

難民ケアに取り組むハンブルク・ドイツ劇場

ロビーに宿泊所、スタッフが炊き出し

今回は、平日の夜でしたが、52名の方にご来場いただきました。テーマがドイツの難民問題とあって、演劇関係者だけでなく、難民やドイツに関心のある方など、層も厚く、対話の幅も広がりました。劇場や公共施設、そこで働く人たちが、ときには身を捧げる覚悟で社会の規則を少し変えて、「直接」難民に手を差し伸べたという事実を、様々な立場で働く参加者で共有できたというのも嬉しいことでした。「国際演劇年鑑２０１７」にトークの内容を一部採録します。ご一読を。（報告　事務局・後藤絢子）

アイルランド、カナダの意欲作

会員が翻訳、リーディングとアプライド

英連邦部会

ＩＴＩ日本センターの任意の部会「英連邦部会」では、今年３回の「戯曲研究＆懇親会」を行いました。会場はいずれも新宿の「フリースペース無何有」。

アイルランド、カナダの意欲作２演目のリーディングのほか、第３回ではすべての教育システムにドラマを活用するアプライド・ドラマ＝別掲＝の実践を試みました。

『その後の二人～ソーニャとアンドレイ』

第１回は４月10日（日）で、アイルランドの作家ブライアン・フリールの『その後の二人～ソーニャとアンドレイ』を取り上げました（訳＝吉岩正晴／リーディング＝松本紀保・川口啓史）。

モスクワの寂れたカフェで、チェーホフの『ワーニャ伯父さん』の登場人物ソーニャと、『三人姉妹』の登場人物アンドレイが出会い、二人は人生と夢を語り合うが、嘘と実の境が見えない……。

第２回は８月11日（木）で、カナダの作家ミッシェル・トレンブレイの『とこしえにあなたのもの…マリー・ルー』（訳＝吉原豊司／演出＝青柳敦子／リーディング＝辰巳次郎・品川恵子・一谷真由美・かわはらゆな）。

単調で意味も生き甲斐も見つけられない日常生活への怒りを家族にぶつける父親。カトリックの戒律に縛られてそこから逃げ出すことの出来ない母親と長女。戒律をかなぐり捨てて自由の世界へ飛び立つ次女。フランス系カナダ人一家の凄惨な末期を描いたドラマ。

第３回は11月６日（日）で、イギリスのアプライド・ドラマ『帰還（Returning）』（プレ・テキスト／構成・アレン・オーエンズ（チェスター大学教授・教育学博士）訳・プラクティショナー（実施者）・オーハシヨースケ）。

ドラマの進行に合わせて、お客様同士が隣席の人と話し合ったり、議論したり、劇の登場人物たち（オーハシさんが一人４役を演じた）に質問して話し合ったり、そんな風にドラマに参加する芝居の特質がよく理解され、客席の反応が思っていた以上に熱く、アプライド・ドラマの可能性を示したと思います。

（報告　副会長・吉岩正晴）

アプライド・ドラマ　Applied Drama　イギリスで始まったドラマ教育の教授法の一つで、応用ドラマ、応用演劇ともいわれます。演劇作品の上演を目的とせず、ドラマを体験すること自体を目的とした活動です。多くの場合、一人または複数のプラクティショナー（実施者）と参加者により、ストーリー（ドラマ）をつくるワークショップ形式で進められます。Cross Curricular（アプローチの仕方が複数の教科にまたがる教授法）による教育システムで、コミュニケーション能力等の向上に広く役立てられています。

ＩＴＩ世界大会のお知らせ

第35回ＩＴＩ世界大会は２０１７年７月14日～22日、スペイン・セゴビアにて開催されます。オープニングセレモニーは７月17日。

併せて７月14日～16日にシアタースクールフェスティバルが開かれる予定です。

世界大会にご興味のある方は、詳細がわかり次第お伝え致しますので、その旨事務局までご一報下さい。

ＩＴＩアジア・太平洋伝統劇国際フォーラム

「歌舞伎――その継承と発展、世界との交流」松竹・岡崎哲也氏が報告

ユネスコが定めた「世界演劇デー」の3月27日に合わせ、「アジア・太平洋伝統劇国際フォーラム」が昨年中国・広州で開かれ、翌28日に「アジア・太平洋地域会議」の討議に移りました。この二つの催しはＩＴＩと中国戯劇家協会（ＩＴＩ中国センター）、広州市が共催して世界22の国と地域が参加し、日本センターからは松竹常務取締役・岡崎哲也氏、ＩＴＩ理事として菱沼彬晁が出席しました。

「伝統劇フォーラム」で岡崎氏は「歌舞伎――その継承と発展、世界との交流」と題し、歌舞伎の歴史を映像を交えて解説、『暫（しばらく）』『忠臣蔵』『娘道成寺』『積恋雪関扉（つもるこいゆきのせきのと）』『勧進帳』『白浪五人男』など、物語性に富んだ絢爛の舞台が参加者の目を奪いました。こうした古典的な作品に加えて、スーパー歌舞伎『ヤマトタケル』や『NINAGAWA十二夜』、アニメを歌舞伎化した『ワンピース』など現代の新作が成功をおさめ、現在上演可能な作品は１０００作を数えるということに、参会者は感嘆の念を隠しませんでした。

「伝統劇フォーラム」を設置

「アジア・太平洋地域会議」の第一の議案は「アジア太平洋地域評議会」のネットワークと作業部会の設置、その事務局を中国センターの中に置くこと、第二の議案はＩＴＩ本部に「国際伝統劇フォーラム＝伝統劇保護発展委員会」を立ち上げることの提案で、いずれも執行部案通り成立し、昨年末スペインで開催されたＩＴＩの執行委員会で正式に承認されました。これを受けて今年6月18～22日、寧夏回族自治区の首府・銀川で「国際伝統劇フォーラム」第1回会議が招集されることになり、中国センターは日本センターの協力に期待を表明しています。

季国平氏、中国の〝大作主義〟に疑問

この2日間の会議を仕切り、司会を務めたのは、中国戯劇家協会の書記で副主席、同時にＩＴＩ国際本部の副会長を務める季国平さんでした。季さんは実は演劇評論家でもあり、中国戯劇家協会という行政機関のトップというだけではなく、中国演劇史から現代演劇論に及ぶ研究者でもあり、同時に現代演劇のプロデュースにも手腕を発揮しています。

中国では経済的発展に伴って、いわゆる大作主義、スターや資金力にもの言わせた大舞台が人気を博しているのに対し、批判的な見解を持っているのが季さんです。彼が主張するのは、小さな舞台に宇宙大の空間を出現させようとする中国演劇の伝統的な美学で、アジア・太平洋地区の伝統芸能と響き合うところがあります。

なお、季国平氏の伝統劇に関する演劇評論集を日本で翻訳出版することに中国文化部は協力の意向を示しています。（報告　理事・菱沼彬晁）

「東京芸術祭２０１６」開催

ＩＴＩ日本センターを組織委員会事務局に

好天に恵まれた初秋の２０１６年９月25日、豊島区南池袋公園で「東京芸術祭２０１６」のオープニングセレモニーが開催されました。この芸術祭は、東京の多彩で奥深い芸術文化を通して世界とつながることを目指した都市型総合芸術祭として創設され、９月１日から12月18日まで開催されました。キックオフとなる２０１６年秋は舞台芸術フェスティバルを豊島区池袋エリアを中心に展開。「フェスティバル／トーキョー16」、「東京芸術劇場〈芸劇オータムセレクション〉」、「としま国際アート・カルチャー都市発信プログラム」、「アジア舞台芸術人材育成部門」の４つの事業が集結し、先鋭的な演目や地域密着型・参加型作品など多様なプログラムが展開されました。ＩＴＩ日本センターは本芸術祭組織委員会事務局を務め、広報ブランディング業務を担いました。

http://www.tokyo-metropolitan-festival.jp/

（報告　事務局・蓮池奈緒子）

花巻早池峰岳神楽、アラブ首長国連邦フジャイラ国際芸術祭に参加

山の神舞、五穀舞、権現舞の３演目

２０１６年２月にアラブ首長国連邦（ＵＡＥ）のフジャイラで第１回フジャイラ国際芸術祭が開催され、日本から早池峰岳神楽（岩手県花巻市）の一行（岳神楽保存会の小国朋身会長以下11名）が招聘されて参加した。

これは、ＩＴＩ日本センターが２０１５年に特別ゲストとして招聘したスーダン出身の俳優、演出家アリ・マフディ・ヌーリー氏（国連親善大使）が、同芸術祭の役員でもあることから、同氏からの要請に応えて実現したもの（ＩＴＩ日本センターは文化庁主催「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」の一環として同年12月に開催した「紛争地域から生まれた演劇７」に同氏を招聘した）。

フジャイラはアラビア半島にある首長国の一つで、アブダビやドバイなどとともに、ＵＡＥを構成している。人口は12万人弱でＵＡＥ全体の３％くらいにあたる小さな国。

早池峰岳神楽の公演は、２月20日と21日の２回行われた。１日目の会場は、フジャイラ市内にあるMCYCD Theatre（２百席くらい）という（王立ならぬ）首長立の劇場であった。演目は、山の神舞、五穀舞、権現舞の３演目。公演には地元のテレビ局が取材に入り、終演後は舞台上で主催者から記念品が贈られた。

２日目は、フジャイラの街から少し離れたディッバ（Dibba）という街にあるモノドラマ・ハウス（Monodrama House）という劇場での公演であった。こちらは、建物内にある劇場の他に、中庭に向けて野外ステージが設けられている。屋台、露店もいくつか出て、人出もかなり多く、くつろいだ雰囲気の中で行われた。演目は三番叟舞、五穀舞、諷誦舞、権現舞の４演目。伝統を守りながら、現代の地域共同体の中に継承されている民俗芸能の実例として、早池峰岳神楽の公演は、フジャイラでの最初の国際芸術祭のゲストとしてぴったりだった。

今回の芸術祭の参加カンパニーのリストを見ると、音楽部門としてＵＡＥからの参加の他に、サウジアラビア、オマーン、ヨルダン、レバノン、パレスティナ、ジョージア、モロッコ、スペイン、ブラジル、コスタリカ、日本、インド、フィリピンの13カ国から参加していた。また、この芸術祭に合わせて、２年に１度行われているモノドラマ・フェスティバル（７回目）が同時に開催されていた（14作品）。

第１回の開催であったが、フェスティバルの速報を伝える印刷物（冊子）が毎日、日替わりで発行され、運営に大学生たちがボランティアで参加しているなど、運営には国際フェスティバルらしさが窺われた。今後も、このフェスティバルを含め、中東・アラブでの演劇舞踊事情に注目していきたいところである。

（報告　常務理事、事務局長・曽田修司）

会員消息（２０１６年１月～１７年１月）順不同・敬称略

【入会・個人会員】６名
大久保康夫（劇団　前進座）
木田幸紀（日本放送協会）
久保寺淳子（スターダス・２１）
後藤祥子（演劇俳優・舞踊家）
佐川大輔（THEATRE MOMENTS）
鈴木健太（劇団J.A.M!／フランス演劇クレアシオン）

【退会】
西川左近
芙二三枝子
藤波文之
結城雅秀

【ご逝去】
中村梅之助（２０１６年１月18日）
伊藤巴子（２０１６年12月17日）

【叙勲・受賞】
第23回読売演劇大賞最優秀演出家賞
鵜山仁
第27回　恩賜賞・日本芸術院賞
坂東玉三郎
東京新聞平成28年度舞踊芸術賞
井上八千代
重要無形文化財保持者（人間国宝）
中村東蔵
第３回ベトナム国際実験演劇祭最優秀作品賞　演劇集団ア・ラ・プラス『かもめ』
同演劇祭最優秀演出家賞　杉山剛志
同演劇祭最優秀俳優賞　蔡恵美
第71回文化庁芸術祭賞演劇部門優秀賞　松竹株式会社
同芸術祭賞テレビ・ドラマ部門大賞　日本放送協会
同芸術祭賞テレビ・ドラマ部門優秀賞　株式会社WOWOW
同芸術祭賞テレビ・ドキュメンタリー部門優秀賞　日本放送協会
第58回毎日芸術賞　石井ふく子

【退会　賛助会員】
アサヒグループホールディングス株式会社
関西テレビ放送株式会社

ITI日本センターは個人、団体会員を募集中

ＩＴＩ国際演劇協会日本センターは舞台芸術・放送芸術を通した国際交流に関心をお持ちの個人・団体の会員を随時募集中。

会員には『国際演劇年鑑』などセンター発行の出版物が無料で配布され、センター主催・共催のワークショップやシンポジウムに割引料金で参加できます。

▽個人会員　入会金６，０００円
　年会費１２，０００円
▽団体会員　入会金６，０００円
　年会費１８，０００円
▽賛助会員　入会金なし
　年会費１８，０００円～
　１００，０００円（一口）

入会金免除　ただ今ご入会の方は入会金免除となります。

ご寄付のお願い

当センターは、「公益社団法人」への移行にともない、寄付金控除など税法上の優遇措置の対象となる特定公益増進法人となりました。個人の場合は、特定寄付金として一定金額まで寄付金控除が認められ、法人の場合は、一般の寄付金の損金算入限度額とは別に、別枠の損金算入限度額が設けられています。詳細は事務局までお問い合わせ下さい。ホームページにも掲載しています

編集後記

▲曽田事務局長が大学の在外研究制度によりカナダに研修留学している間、事務局長代行を務め、事務局の仕事量の多さには驚いた。業務の実質は二人の事務局長補佐と二人の事務局員が効率よく進めてくれるが、それでもこの一年間はＩＴＩに明け暮れた感じ。ＩＴＩの果たすべき役割の多様性と重要性を再認識した一年でもあった。（吉岩）

▲「演劇デー」の３月27日、ＩＴＩの祝祭行事に招かれ、スピーチの指名を受けた演劇人は、腕によりをかけて起草しなければならない。これを中国の広州で聞いた。ロシアの高名な演出家アナトリー・ワシリエフさん。「演劇の力」と題して「演劇はありとあらゆる形式が必要です。しかし、恐怖の演劇だけはご免です。宗教や部族の違いはあろうとも、街角や広場に死体がころがり、血潮が流れる演劇だけはあってはなりません」と。（菱沼）

（© 国際演劇協会日本センター 2017）

I.T.I.　第127号
2017年1月31日発行
発　行　公益社団法人国際演劇協会日本センター
発行人　永井多恵子
編集人　吉岩正晴　菱沼彬晁
住　所　〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1国立能楽堂内
Tel03-3478-2189　Fax03-3478-7218
Email:mail@iti-j.org
URL http://iti-japan.or.jp

歌舞伎座
東京都中央区銀座四－十二－十五　地下鉄「東銀座駅」直結
電話〇三（三五四五）六八〇〇（代）
江戸歌舞伎三百九十年を豪華顔合わせで祝う猿若祭
江戸歌舞伎三百九十年
猿若祭二月大歌舞伎
2月2日(木)初日～26日(日)千穐楽
昼の部　午前11時開演
一、猿若江戸の初櫓
二、大商蛭子島
三、四千両小判梅葉
四、扇獅子
夜の部　午後4時30分開演
一、門出二人桃太郎
二、絵本太功記
三、梅ごよみ
製作　松竹